

9月8日(土) 14:00-16:00 第7部会

「国家神道」における公共性と宗教性—昭和戦前期を中心に—

代表者：藤田 大誠

「国家神道」研究の課題と展望

齊藤 智朗（國學院大）

神社対宗教問題に関する一考察—神社参拝の公共性と宗教性—

藤田 大誠（國學院大）

無格社整理と神祇院

藤本 頼生（國學院大）

今泉定助の思想—神道的国体論の宗教性—

昆野 伸幸（神戸大）

コメンテータ：小島 伸之（上越教育大）

司会：藤田 大誠（國學院大）

本パネルは、平成 24 年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（C）「帝都東京における神社境内と「公共空間」に関する基礎的研究」（研究課題番号：22520063、研究代表者：藤田大誠）、並びに平成 24 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）「近現代日本の宗教とナショナリズム——国家神道論を軸にした学際的総合検討の試み」（研究課題番号：23520079、研究代表者：小島伸之）による二つの共同研究グループが協力し、双方に重なり合う課題の一つである「国家神道」をテーマとして企画したものである。

近年、「国家神道」研究は、「国家神道」という枠組の再考や言説分析の観点からの理論的・評論的考察が目立つ一方、かかる考察の基盤や前提となるべき近代の神社制度や神社境内（空間）、神職・神道人そのものの実態やその変遷過程について具体的な史料をもとに検討している研究も徐々に蓄積されつつあり、神道史や宗教史のみならず、地域社会史や日本思想史、日本教育史など、多岐に亘るアプローチから活発に取り組みされている。

とりわけ、近年の注目すべき成果として挙げられる、畔上直樹『「村の鎮守」と戦前日本——「国家神道の地域社会史」』（有志舎、平成 21 年）や島藺進『国家神道と日本人』（岩波新書、平成 22 年）、昆野伸幸「近代日本における祭と政——国民の主体化をめぐる」（『日本史研究』第 571 号、平成 22 年）などは、従前の「国家神道」研究（特に近代神道史におけるもの）について「制度史偏重」との批判を込めつつ、地域社会史や宗教史、日本思想史の観点から新機軸を打ち出す試みがなされている。因みにこの三者はいずれも共同研究のメンバーである。

また、林淳は、「近代仏教と国家神道——研究史の素描と問題点の整理」（『禅研究所紀要』第 34 号、平成 18 年）において、近代日本宗教史の諸問題（国家神道、近代仏教、新宗教、宗教概念など）の研究史は明治期の比重が高い一方で、大正・昭和戦前期、とりわけ「十五年戦争期」（或いは「ファシズム期」、「総力戦期」、「準戦時下・戦時下」）に対する関心が著しく低いとして、そこに「近代宗教研究の脆弱さがある」と指摘していたが、これも近年、先の畔上や昆野の論考のほか、阪本是丸「日本ファシズム」と神社・神道に関する素描」（『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第 6 号、平成 24 年）などの成果が出始めており、また、本パネルの発表者・コメンテータがメンバーとなっている前記の二つの共同研究においても当該時期を対象とする研究が進められている。

そこで本パネルでは、両者の共同研究における成果を接続することで、所謂「国家神道」（近年における研究の進展に伴い、逆にその定義は混迷を極めていたため、ここではあえて概念規定はひとまず棚上げにしておく）研究の現状（到達点）を踏まえつつ、次なる研究段階への展望（神道史が蓄積してきた制度史的な基礎研究の成果を共有財産とした上での社会史的・思想史的研究）を試みることを目的とする。

具体的には、昭和戦前期に焦点を当てて、早くから指摘のあった神社・神道における「公共性」と「宗教性」の相剋（阪本是丸『国家神道形成過程の研究』岩波書店、平成 6 年）を主題として、新たな「国家神道」研究への足掛かりにしたいと考えている。藤田大誠の司会のもと、「「国家神道」研究の課題と展望」（齊藤智朗）、「神社対宗教問題に関する一考察」（藤田大誠）、「無格社整理と神祇院」（藤本頼生）、「今泉定助の思想」（昆野伸幸）という発表の後、宗教社会学・近代日本法史の見地から小島伸之がコメントを行い、フロアも含めた討議を予定している。

9月8日(土) 14:00-16:00 第9部会

宗教における死生観と超越

代表者：高田 信良

宗教的信における超越とその構造—諸井慶徳の宗教論—

澤井 義次(天理大)

危機の体験と死生観の形成—現代日本におけるキリスト教理解—

中村 信博(同志社女子大)

ムカッリフ(能力者)概念をめぐる信仰告白表明と審判

四戸 潤弥(同志社大)

〈下への超越〉と〈将来する浄土〉—武内義範の「信楽の思惟」—

高田 信良(龍大)

コメンテータ：氣多 雅子(京大)

司会：高田 信良(龍大)

本パネルは、龍谷大学人間・科学・宗教オープンリサーチセンター(私立大学戦略的研究基盤形成支援事業採択2010-2012)「死生観と超越——仏教と諸科学の学際的研究」、unit-2「宗教多元世界における死生観と超越の対話的研究」における研究成果の一端を発表するものとして企画された。「死生観と超越」プロジェクトは、仏教死生観を共通の鑑としながら、死生観と苦悩の超越に関する学際的研究を通して、死生観と超越の現代的意義を複眼的に解明することをめざす。

unit-2「宗教多元世界における死生観と超越の対話的研究」は、幕末維新期頃にまで淵源して形成されてきた現代(日本)における宗教多元状況(religious pluralism)は、「仏教と一神教(アブラハム宗教)の交錯するところ」「仏教と諸宗教の交錯するところ」であるとの理解に立ちつつ、「宗教多元世界における死生観・救済観の対話的研究」を関心事とする。

天理教や金光教などの宗教運動態は19世紀半ばに生まれた。キリスト教は欧米からの近代諸文明とともに伝わり弘まってくる。明治新政府の宗教政策とも相まって、現代の諸宗教(教派宗派)が形成されてきた。新たな時代のなかで、仏教に生きる人々もさまざまな実践を追求していく。万国宗教会議(1893)への参加もなされた。キリスト教の教えに出遇ってキリスト者となる人々、イスラームの教えに生きる人々も現れてくる。仏教に関する宗教研究もさまざまになされ、哲学諸思想も学ばれていく。『歎異抄』が真宗世界の外でも広く知られるようになる。宗教に出会い生きる人々は、それぞれにおける宗教的实践を求め、学的関心のなかで思惟していく。宗教の教えに生きる各人の歩みは、それぞれにおける宗教形成に参加しているといえるだろう。

宗教には、それぞれ、独自の死生観(世界観、教え)がある。多くの宗教が混在併存するような状況においては、自宗教の死生観・教えが新たな形で実践される。本パネルでは、天理教・キリスト教・イスラーム・仏教に生きる人々の生・学的営為に焦点を当てる。いずれも、宗教を求め、信仰に生きた人々である。個々には、相互に出会ったり関係し合うことはなかったかもしれないが、各人が自身の宗教を生き信仰を求めめるなかでの学的関心は、「宗教多元世界における死生観と超越」を思索したものといえるだろう。各々の宗教的精神を求めていった歩みをみていくことを通して、現代の宗教多元世界における「死生観と超越」研究の一端としたい。

【天理教】

天理教学者で宗教学者でもあった諸井慶徳(1915-1961)が、宗教学的に考察した宗教的信の本質構造を明らかにし、そのうえで、死生の意味をめぐる彼の天理教教義学的視座を探究したい。

【キリスト教】

キリスト教信仰は個人的体験と分かちがたい。だが、これまで一部の神学者などの場合をのぞき、ほとんど学的議論の対象とはされてはこなかった。入信動機や私的の死生観にと解消されがちなキリスト者の危機的体験が、どのように神学思想(教義)、伝統、聖書理解と関係するのかを具体的事例によって考察する。

【イスラーム】

イスラームはキリスト教徒同じく能力者概念を入信要素に加えている。この概念は上記一神教に固有のもので、最後の日に行為が審判される。同概念を通じて、イスラームの信仰と行為について、クルアーン及び預言者のことば(ハディース)と、これまでの学者の見解を比較検討し、イスラームの一側面、特に法学との関係を検討したい。

【仏教】

「生死いづる道」「浄土往生」を求めめるなかで出遇われた〈念仏・信心〉(親鸞)は、仏教死生観を生きるひとつの在り方である。武内義範(1913-2002)が『教行信証の哲学』『親鸞と現代』において思索する「信楽の思惟」を追思索するなかで、仏教における「死生観と超越」について考察する。

9月8日(土) 14:00-16:00 第11部会

公共空間における宗教的ケアのあり方ー「臨床宗教師」の可能性ー 代表者：高橋 原

ケアにおける宗教性再考	高橋 原 (東北大)
米国の病院チャプレンにみる公共空間での宗教的ケアの在り方	小西 達也 (爽秋会岡部医院)
医療現場の宗教者からみえてくる宗教的ケア	森田 敬史 (東北大)
被災地から見た「臨床宗教師」の可能性と課題	谷山 洋三 (東北大)
	コメンテータ：鈴木 岩弓 (東北大)
	司会：高橋 原 (東北大)

(1) 本パネルの位置づけと目的

2011年3月の東日本大震災以来、医師や臨床心理士とともに、多くの宗教者が被災地に入り、連携して支援活動を行ってきた。その中で、人々が死に向かい合う際に宗教的ニーズと呼ぶべきものが生じているにもかかわらず、必ずしもそれが適切に受けとめられていないという問題が指摘されてきた。そこで、さまざまな信仰を持つ人々の宗教的ニーズに対して適切にケアを行なうことができる人材（仮称：臨床宗教師）を育成することを目的に、本年4月より東北大学に実践宗教学寄附講座が設置された。

発表者達はいずれもこの講座に関わり、公共空間において宗教者が行なう人々の心のケアのあり方についての研究に着手したところである。このパネルでは、発表者達のホスピス等での実践経験を踏まえて、公共空間における宗教的ケアをめぐる問題点と課題を整理して問題提起とディスカッションを行ない、今後の研究の方向性を探る出発点としたい。

(2) 本パネルのテーマ

本パネルのテーマは、公共空間における宗教的ケアのあり方である。東日本大震災後には、宗教的ニーズが存在するにもかかわらずそれに対応する宗教者が圧倒的に足りないという状況が現出した。そのような状況において、宗教者が、自身と異なる信仰を持つ人々の宗教的ニーズ、あるいは信仰を持たないできた人々に生じた宗教的ニーズに応えようとする時に、どのような問題が浮上するのか。そこで行われるのは「宗教的ケア」なのか、それとも「スピリチュアルケア」なのか。来るべき次の震災への対応も見据えて様々な角度から検討し、宗教の公益性を巡る議論にも資するものとした。

(3) 各発表者の報告内容

【高橋】

従来なされてきた「宗教的ケア」と「スピリチュアルケア」の区別を踏まえ、心のケアにおいて求められる「宗教性」とは何かを、「宗教的ケア」が行われる現場に即して考察する。

【小西】

発表者自身の体験に基づき、米国における病院チャプレンの宗教的ケアを取り上げ、チャプレンがどのような形で、自身と異なる宗教・宗派の人（患者）たちの宗教的ケアや宗教儀式提供のニーズに応えているのかを紹介、公共空間での宗教的ケアの在り方を検討、その必要条件を探る。

【森田】

超宗派の長岡西病院ビハーラ病棟（新潟県）において、常勤ビハーラ僧であった発表者自身の実践経験に基づき、医療現場での宗教者のあり方を吟味し、さらに病棟と連携を保持してきたボランティア組織である「仏教者ビハーラの会」の会員（地元仏教僧侶の有志）の活動を紹介します。宗教的ケアに関する一考察を行う。

【谷山】

発表者自身の被災地での体験に基づき、宗教者が提供するスピリチュアルケア、宗教的ケアの事例を参考にして、「臨床宗教師」の可能性と課題について検討する。

以上を通じて、本パネルでは公共空間における宗教的ケアの可能性を問い直したい。

9月8日(土) 14:00-15:40 第12部会

災害の語りの宗教学

記紀が描く罪と災害
江戸時代の災害の語り
東日本大震災後の語り

代表者：松村 一男

平藤喜久子（國學院大）
松村 一男（和光大）
竹沢尚一郎（国立民族学博物館）

コメンテータ：深澤 英隆（一橋大）

司会：松村 一男（和光大）

日本列島は災害に見舞われることが多い。モンスーン地帯にあることから毎年定期的に台風と高波による被害があるが、地質学的にも太平洋プレートと北米プレートとフィリピン海プレートそしてユーラシアプレートという4つのプレートが会合する世界でも稀な位置にあり、従って地震が多く、火山活動も活発である。明治以降に限っても関東大震災、兵庫県南部地震、そして今回の東日本地震などによって多くの人々が悲劇的な運命を迎えた。また火山の噴火による土石流や豪雨による河川の決壊、土砂崩れでも多くの人々が被害を受けている。

人はそうした災害に出会った時、それを語る物語を生み出す。現代では科学的な因果関係による説明が行われるが、もちろん人心はそれだけでは満足、納得をしない。それは病や事故などに出会った時と同様である。自分たちの遭遇する災害、被害をどのように理解し受け止め新たな歩みを始めるのかに際しては宗教的な物語を作り出すことが少なくない。今回のシンポジウムでは災害の多い列島に住む日本人は古くからどのような形で災害を宗教的に語ってきたかに焦点を当て、古代、近世、現代と三つの時代を考察し、通時的な宗教の語りの形が認められるかを考えてみたい。

【平藤】

記紀をはじめとする古代の神話や伝承が、どのような災害（災い）を描いてきたのかを災因論としての「罪」の位置づけから考察する。たとえば天照大神が天の岩屋に籠もった際には、暗闇が続き、さまざまな災いが起こったとされている。その原因は須佐之男命の高天原での乱暴行為であるとなっている。この乱暴の内容は、大祓の祝詞で「天津罪」とされる罪の内容と一致している。また、允恭天皇のとき、夏に汁が凍るという天変地異が起こったとされ、その原因は天皇の皇子たちの近親相姦であったとなっている。こうした災害を引き起こす罪の物語について論じていく。

【松村】

浅間大噴火、信州地震、江戸安政大地震などの江戸時代の災害の記録を紹介し、そこに見られる宗教的語りを分析していく。天理教の泥海古記にも触れる。自然災害を魚が知らせるとか地震は地下の生物が引き起こすという観念が伝統的にあり、それが江戸時代の災害においても認められるが、そこでは罰という見方と世直しという見方が共存している。また、そうした観念は日本のみならず地震多発地帯である環太平洋地域の他の国々においても認められる。

【竹沢】

東日本大震災後、長期に亙り現地に滞在して、百名を超える人々からの話を記録してきた。さまざまな語りの中でも印象的であったのは、身内や友人を亡くした人々が、なぜ自分が（自分だけが）生き残ったのか、と自問していることであった。答えのないこの問いに対して、いかなる答えの試みがなされており、いかなる答えが可能であるのかを考えていく。

これらの3つの発表について、宗教的言説の分析に長年携わってきた深澤（『啓蒙と靈性——近代宗教言説の生成と変容』岩波書店、2006）がコメントを加え、その後議論をフロアにも開いていく。

今回のパネルは日本という限定した地域を対象とし、災害の宗教的語りの分析という共通したテーマによって通時的な宗教観を浮かび上がらせようという試みである。勿論、地震も風水害も日本に独自のものではないから、近隣のアジア諸国においても類いの語りが認められるはずである。そうした日本以外の地域における災害の語りとの比較の可能性についても議論を行ってみたい。

9月9日(日) 14:10-15:50 第1部会

宗教学、社会学、民俗学の誕生—ヨーロッパと日本の共振—

代表者：安藤 礼二

民族学と民俗学—折口信夫『古代研究』の起源—

安藤 礼二 (多摩美術大)

モース宗教社会学の生成

溝口 大助 (九大)

ペッタッツオーニ宗教史学の出発点

江川 純一 (東大)

コメンテータ：関 一敏 (九大)

司会：安藤 礼二 (多摩美術大)

19世紀後半にヨーロッパに誕生した比較宗教学と20世紀初頭に日本で確立された民俗学は起源を共有し、相互に密接な関係をもったものではなかったのか？ 歴史と伝統の異なる諸文化が衝突し世界が一元化された時代になってはじめて、集団として生きる人間の普遍性と固有性が探究されることが可能になった。宗教学という新たな学問を提唱したマックス・ミュラーのもとには南條文雄、高楠順次郎という日本からの留学生たちがおり、民俗学を創出した柳田國男と折口信夫はジェイムズ・ジョージ・フレイザーの『金枝篇』を読み込んでいた。ヨーロッパと日本は共振していたのだ。大正末、柳田が自身の学問を集大成するために創刊した雑誌は、『民俗』ではなく『民族』と名づけられた。2つのミンゾクガク、エスノロジーとフォークロアは不可分なものと考えられていた。

雑誌『民族』で、後に『古代研究』としてまとまる諸論考を精力的に発表していた折口信夫の周辺には、高楠順次郎に連なる浄土真宗本願寺派の僧侶にして人類学者、同世代の宇野野空や赤松智城がいた。宇野と赤松は雑誌『宗教研究』の創刊に関わり、同時代のヨーロッパで成立した人文諸科学、宗教学、人類学、社会学、民族学の成果をいち早く紹介していった。『民族』を実質的に編集していた岡正雄はヴィルヘルム・シュミットに師事し、柳田と折口のごく近くにいた松本信広はマルセル・モース（およびジャン・ブシルスキー）に師事した。この時期以降、折口のテキストのなかにフレイザーを批判的に継承したモースの「mana」とシュミットを批判的に継承したラッファエーレ・ペッタッツオーニの「至上神」が登場してくる。結果として、折口の古代学の体系は、モース（もしくはロジェ・カイヨワ）とペッタッツオーニの学説を一つに総合しようとしたミルチャ・エリアーデの宗教学の体系と酷似したものとなった。

モース、ペッタッツオーニ、エリアーデにとっても、極東の列島に残された宗教文化は特権的な研究の対象であった。たとえば、社会学の基礎を築いたモースは、和漢資料に基づいたはじめての仏教百科事典を編纂した初代日仏会館館長シルヴァン・レヴィに生涯少なからぬ影響を受けた。デュルケムがモースの博士論文の指導教官として選んだのがレヴィであった点、またレヴィが1898年に書いた『ブラーフmana文献における供犠の理論』に衝撃を受けてモースが『供犠論』（及び未完の博士論文『祈祷』）を書いた点からみても、モース（≡デュルケム）社会学にとりインド文献学・佛教学の思考が重要であったことがよくわかる。一般の理解とは異なり、日本仏教を対象として最も真摯に取り組んだレヴィが、「社会学」の誕生と深い関係があるというのはその故である。また、ペッタッツオーニの最初の学術的著作は1904年にボローニャの新聞に発表された日本の宗教についての論考であった。ペッタッツオーニは国家神道にも強い関心を抱き、日本に関する著作を2冊著している。ペッタッツオーニの著作のなかには姉崎正治や加藤玄智らの研究が登場する。この日伊の連関はイタリアでも研究されていない。

本パネルは、ペッタッツオーニの宗教学を研究する江川、モースの社会学を研究する溝口、折口の民俗学を研究する安藤が集い、ヨーロッパの比較宗教学と日本の民俗学の起源を問直し、近代というグローバリズムの時代が可能にした人文諸科学、宗教学、人類学、社会学、民族学もしくは民俗学といった新たな学問の歴史性、およびその可能性と不可能性をあらためて検討し直す試みである。加えて、宗教学とその関連諸科学の学問史に詳しい関がコメンテータを担当する。広く批評と批判を仰ぎ、今後も継続するプロジェクトとしたい。

9月9日(日) 14:10-15:50 第2部会

宗教者側の実践活動から見えてくる東日本大震災後の宗教学的課題 代表者：新免 貢

魂への配慮—被災地校教育支援の現場から—

長谷川(間瀬) 恵美 (桜美林大)

被災者支援において、〈仏教的〉であるとはどういうことか？

坂井 祐円 (南山宗教文化研究所)

「再構築」への奉仕—脱カルト支援を手がかりに—

竹迫 之 (日本脱カルト協会)

コメンテータ：新免 貢 (宮城学院女子大)

司会：長谷川(間瀬) 恵美 (桜美林大)

【長谷川(間瀬)】

長谷川(間瀬) 恵美氏(桜美林大学リベラルアーツ学群・准教授)は、「魂への配慮—被災地校教育支援の現場から」と題する発表を行う。氏は、被災地の小学校において、音楽(パストラル・ハーブ)を通して、過酷な震災・津波を体験した一人ひとりの「魂」に配慮し、痛みと悲しみに寄り添うスピリチュアル・ケア(癒しの取り組み)を実施している。この取り組みは、近代というシステムを超えたところに位置する霊性(スピリチュアリティ)が、他者の問題を共に担うという倫理と深く結びついているという認識にわれわれを導く。霊性と倫理との不可分の関係は、教学的知識よりも課題共有の重視という新しい型の宗教論の重要な構成要件となることが期待される。

【坂井】

坂井祐円氏(南山宗教文化研究所・非常勤研究員)は、「被災者支援において、〈仏教的〉であるとはどういうことか？」と題する発表を行う。今回の大震災では、宗教者による被災者への支援活動がこれまで以上に注目されている。とりわけ伝統仏教教団による組織的な活動は目を見張るものがあり、宗派を超えた連帯も生まれている。〈人間的〉支援活動と〈仏教的〉支援活動の違いはあるのか、あるとすればそれは何なのか、果たして〈仏教的〉とは活動のあり方に関わるのか、信念や教義の問題に関わるのか。これらの問いもまた、上述の新しい型の宗教論と関係する。宗教者による被災者への支援活動は、「縁(関係)に支えられる」という意味での〈支縁〉を宗教者自身に気づかせ、「縁(関係)」の広がり自体を霊性と倫理の現れとする仏教論の展望を開く。

【竹迫】

竹迫之氏(日本脱カルト協会理事、日本キリスト教団白河教会主任牧師)は、「『再構築』への奉仕—脱カルト支援を手がかりに」と題する発表を行なう。上述の2名の発表者とは違って、自身がカルト脱会者でもある氏は、宗教者側による実践活動に潜むカルト的側面に注意を促す。氏の発表の独自性は、被災地への復興協力ボランティアに紛れ込んで蠢動する各種カルト団体の実態観察から得られる「宗教団体を母体とする支援運動のカルト化」を指摘することにある。カルト的霊性を識別する霊性と震災後の過酷な現実に向き合う霊性という観点から、原発事故がもたらした広範囲に及ぶ放射能汚染に対峙する震災後宗教に求められる「支縁」のあり方が再構築される。

これら3名の実践活動に基づいた現場報告的発表に対して、本パネル代表者の新免(宮城学院女子大学学芸学部・教授)は、自らの被災者支援活動を踏まえ、阪神淡路大震災と東日本大震災の両方の震災の体験者として、第3者が語り得ぬ被災者の苦しみを前にした既成の宗教言説の限界、可能性、再構築、市民と協働する実践的取り組みの重要性、並びに、課題共有重視型の宗教論を中心にコメントすることになる。

本パネルの意図は、個人の良心にゆだねられる仕方ではいかようにも広がりゆく横のつながりの中で、「いのち」の多様性に基礎づけられた共同体再生へ向けて、弱さや小ささを絆とする社会システムへの転換に貢献することが今日における宗教の存在意義であるとする宗教理解の構築にある。人間の手では解決不能と思われる難問が山積する今日の世界に立ち向かうためには、頭で理解する社会的装置としての制度的・規範的宗教から自らの体でわかる人間中心型の立ち上がる宗教への転換が、宗教学の言説においても要請される。本パネルは、こういう時代的要請を宗教論の中に加えることが震災後の重要な宗教学的課題であるという認識に立っている。

9月9日(日) 14:10-16:10 第3部会

伝統の危機とユダヤ教―築きあげたものが壊れるとき―

代表者：勝又 悦子

翻訳聖書に見る「危機」解釈と克服―金の子牛像事件を中心に―

大澤 耕史(京大)

「第二神殿崩壊」はいかに解釈されたか

勝又 悦子(同志社大)

マイモニデス『イエメンへの手紙』考察―共同体崩壊危機の克服―

神田 愛子(レオ・ベック・カレッジ)

19世紀東欧ユダヤ教の危機とハラハー的伝統の革新

市川 裕(東大)

コメンテータ：小田 淑子(関西大)

司会：勝又 悦子(同志社大)

東日本を襲った震災とその復興の過程はまさにこの現代の、現在進行形の事象である。過去の、しかも日本とは遠く離れたユダヤ教文献と向き合う我々には自らの研究対象ではこの壮絶なる眼前の事象に対して何も益することができないではないかという無力感がある。

しかし、歴史を振り返れば、ユダヤ教、ユダヤ教徒は、「なぜ、このようなことが起こるのだろうか」「なぜ、神はこのような試練を与えるのか」と自問自答せざるを得ない事象に直面することの連続であった。バビロン捕囚、第二神殿崩壊、離散した先々での追放、迫害、イベリア半島からの追放、ポグロム、その究極であるシヨア……。また、こうした外側からの圧力による明白な「事件」「迫害」だけではなく、困難な状況、異文化・異宗教の中に長く置かれることによってユダヤ教の内側に徐々に伝統と対峙する勢力が浸食し、ユダヤ教共同体としての存続の危機に陥らせた場合もある。古くは、シナイ山での金の子牛事件に始まる。ヘレニズム世界、イスラム世界、キリスト教世界、近代ヨーロッパの中でユダヤ共同体は絶えず分裂の危機にさらされていた。

このような「外から」「内から」の力によって、ユダヤ教の伝統・築きあげてきたものが壊れるとき、壊れようとするとき、ユダヤ教はどのように、その危機を解釈し、立ち向かったのか。どのような道を模索したのだろうか。その姿、諸相を文献から読み取ること、我々の現実をとりまく状況に対するささやかなヒントを提供することができるのではないだろうか。こうした展望のもと、本パネルでは、様々な時代と地域のユダヤ教、ユダヤ教徒、ユダヤ人が、伝統崩壊の危機、生存の危機を、いかに解釈し、向き合おうとしたかについて、事例を挙げながら考察する。

各人の発表概要は以下の通りである。

【大澤】

本報告では、古代のイスラエルの民が行った偶像崇拜行為として有名な、出エジプト記 32 章の金の子牛像の事件を題材とし、後世のユダヤ教がその宗教的「危機」をどのようにとらえ、また克服していったのかを主に諸翻訳聖書を用いて分析する。翻訳聖書のうち特にアラム語訳であるタルグムは、単純な翻訳以上に多くの加筆が施されており、聖書の直接的な解釈を知るのに非常に有効な文献である。対象とする文献については、諸翻訳聖書に加えて必要に応じてその他の聖書解釈も参照する。

【勝又】

紀元 70 年、ローマ帝国による第二神殿崩壊はユダヤ教の存在の根底を揺るがす事件であり、今なお、その衝撃と追憶が、儀礼の中で、祈りの中で、受け継がれている。本発表では、第二神殿崩壊後に編纂された口伝トーラーの中で、いかに神殿崩壊が語られるか、年代別に、ジャンル別に考察する。そして、神殿という場所・モノ的な中心を失ったユダヤ教が、口伝というカタチにならないものを基盤に存続したことの意義を考える。

【神田】

『イエメンへの手紙』(*Iggeret Teman*) は、マイモニデスがタルムード学院長ヤコブ・ベン・ナタナエルの求めに応じ、1172 年にイエメンのユダヤ共同体に書き送った手紙である。サラディンに反抗するシーア派が実権を握り彼らに改宗を迫るようになると同時に、メシアを自称する者が出現したことにより共同体は混乱に陥る。共同体崩壊危機に際し、ラビとして彼が聖典に基づいてユダヤ伝統をどう解釈したかを本発表では考察する。

【市川】

19 世紀東欧の近代化とロシア帝国の征服、またユダヤ社会内部から生じたハシディズムの分派と啓蒙主義ハスカラーの浸透という政治的文化的危機において、ユダヤ正統主義がユダヤ精神のよりどころとしたのがハラハー的伝統であったことを考察する。

9月9日(日) 14:10-16:10 第5部会

宗教史研究のフィールドワーク論

代表者：大谷 栄一

近代仏教研究における文献史料と文化資料―梵暦資料の多様性―	岡田 正彦 (天理大)
佐田介石をめぐる史料調査とその重層―浅野研真から谷川穰まで―	谷川 穰 (京大)
私が資料について感じる二、三のこと―京大文化史学派研究から―	菊地 暁 (京大)
正徳寺資料から見える戦前の仏教国際化	吉永 進一 (舞鶴工業高専)

コメンテータ・司会：大谷 栄一 (佛教大)

(1) 本パネルの位置づけ

発表者たち(大谷・吉永・岡田・谷川)は、2011年4月より、共同研究「近代宗教のアーカイヴ構築のための基礎研究」(代表者：大谷、科学研究費補助金・基盤研究(B)、2011-2014年度)のメンバーとして、近代日本宗教史に関する調査・研究を進めている(現在、メンバーは19名)。

本共同研究の目的は、近代日本宗教に関する一次資料のアーカイヴを整備し、それらの資料を分析した上で、近代日本宗教史研究の進展に貢献するための基礎研究を行うことである。この目的を実現するため、現在、全国各地に散在する戦前の宗教雑誌(とくに明治期の仏教雑誌)の所蔵状況に関する調査を中心に研究活動を実施している。

本パネルは、この調査・研究の中間報告というべき位置づけを持つ。

(2) 本パネルの目的

収集した資料をどのように分析し、記述するかという研究実践の前提として、そもそも宗教史研究に携わる研究者は資料をどのようにどこで収集するのか、という調査論的な問いは、従来の近代日本宗教史研究では十分に深められていない。そもそも「資料(史料)」とは何か? どのようにどこで調査するのかという実践論とともに、「資料(史料)」の同定という認識論的問題が浮上する。

そこで、今回、「フィールドワーク(現地調査)」という視点を設定し、実際に自分たちが行ってきた(あるいは行っている)事例をもとに、宗教史研究のフィールドワーク論をテーマとしたパネルを行いたいと思う。

各自の事例をもとにして、宗教史研究のフィールドワークにおける認識論・実践論的な諸問題を問い直すことで、宗教史研究の調査論に関する貢献を行うことが、今回のパネルの目的である。

(3) 発表者の報告内容

各発表者の報告内容は、以下の通りである。

【岡田】

仏教系の思想運動でありながら、天文観測や精密機器の製作、仏暦の頒布や売薬といった多彩な活動を展開した「梵暦運動」関係資料の広がりを紹介しながら、近代仏教研究資料の多様性について考察する。

【谷川】

明治初期の護法僧・佐田介石。彼の雑誌や著作を調査・蒐集し、伝記を刊行した昭和初期の仏教社会学者・浅野研真。その旧蔵文書群を引き継ぎ調査を続けている歴史学者の私。その調査履歴と問題点を具体的に検討する。

【菊地】

京都帝国大学における実証的宗教研究は、「文化史学」を標榜する史学科の研究者によって展開された。民俗学をも取り込みつつ独自の日本宗教史を構想したこの学派に、いかなる資料からアプローチできるかを検討する。

【吉永】

正徳寺(大阪府高槻市)に所蔵されている宇津木二秀関係の資料を中心に、多国籍に及ぶ近代仏教関係資料の調査研究の成果、その問題点、今後の展望について報告する。

各発表者の専門は、それぞれ岡田(宗教学)、谷川(歴史学)、菊地(民俗学)、吉永(宗教学)であり、司会・コメンテータを務める大谷は社会学である。さまざまな研究領域から、宗教史研究のフィールドワーク論を多角的に問い直すことで、近代日本仏教史の資料調査に関する新たな知見を提示することをめざしたい。

9月9日(日) 14:10-16:10 第7部会

神祇伯白川家と伯家神道

代表者：山口 剛史

諸国門人帳にみる白川家の門人
白川家の社祠勧遷と位階執奏
白川家門人齋藤彦麿と鎮魂祭
初期禊教の展開と白川家

金光 英子(金光図書館)
石川 達也(戸田市立郷土博物館)
山口 剛史(皇學館大)
荻原 稔(都立青峰学園)

コメンテータ：幡鎌 一弘(天理大)

司会：井上 智勝(埼玉大)

本パネル発表では、『神祇伯白川家と伯家神道』と題し、それぞれ以下の通りの発表を行う。

なお、司会は井上智勝、コメンテータは幡鎌一弘がつとめる。両名は、いずれも当該分野における代表的な研究者であり、近世の宗教史における白川家の果たした役割や対抗する勢力である吉田家、朝廷・幕府といった世俗権威との関連など幅広い視野で、各発表者に対して、専門的な見地から意見を述べるものである。

本パネルの一番の意義は、従来顧みられることの少なかった近世神社制度における白川家の占めていた位置を解き明かすことであり、各自がそれぞれの立場と視座からその成果を発表することにある。

【金光】

「白川家門人帳」に記載された内容を分析し、門人の概要、各冊の特徴、特筆すべき門人などを報告する。金光は、「白川家門人帳」や「諸国勧遷留」、「諸国執奏留」に代表される「白川家資料」を所蔵している金光図書館に所属し、白川家門人帳に関する研究を行っており、今回はその一端を紹介する。

【石川】

「諸国勧遷留」や「諸国執奏留」から見た白川家による社祠勧遷と門人の位階執奏について分析を行い、白川家を経た信仰の広がりや白川家の門人把握を明らかにする。村の鎮守や屋敷神といったような身近な社祠を勧請した人々や、それに類する神社に属した地方の神職がどういった経緯で「神職身分」を獲得していくのかを通じて、白川家が地域社会の核となる社やその中心的存在となる「神職」にどのような影響力を持っていたのかを考察する。

以上の金光と石川の報告は、本パネル発表の総説と概説とも言えよう。

【山口】

白川家門人の国学者齋藤彦麿と伯家鎮魂祭について、彼の遺した資料から考察を加える。山口は、鎮魂祭を中心に神祇伯白川家及び伯家神道の研究を継続してきたが、皇室祭祀であり白川家が分掌した鎮魂祭の実態を明らかにすることから始めた研究を伯家神道全般に広げ、本報告では江戸時代後期の国学者が鎮魂祭をどのように捉えていたかを考察する。

【荻原】

近世末期の白川家が、門人からの無理のある要望にも丁寧に対応しようとしていた事例の紹介を通じて、同時期の白川家と初期禊教の関係を論ずる。後の教派神道としての禊教に、白川家がどのような影響を与えたのかを具体的に検証し、いわゆる民衆宗教の活動が社会的な地位を獲得するまでの経緯を考察する。

以上、山口と荻原の報告は、個別の事例を通じて白川家や伯家神道の実態に迫るものである。

本パネル発表の目的は、神祇伯白川家が全国の門人に対して行っていた位階の執奏や祭神の勧遷、伯家神道の伝授の実態を明らかにすることである。それは、神社を中心とする各地域社会と中央(白川家)との関係を検証し、両者の交渉が地域文化の発展に与えた影響を考察することでもある。また、一般民衆に対し幅広く活動を展開し国学者とも濃密な関係を構築していた白川家の基礎的な研究を進めたい。

9月9日(日) 14:10-16:10 第8部会

戦後の日本仏教論—諸学説の再検討—

代表者：オリオン・クラウタウ

戦後日本仏教学説の課題

オリオン・クラウタウ(龍大)

連続と断絶—服部之総の「親鸞」—

桐原 健真(東北大)

圭室諦成著『葬式仏教』再考

ライアン・ワルド(明大)

戦後日本仏教と民俗学—五来重の場合—

碧海 寿広(宗教情報リサーチセンター)

コメンテータ：佐藤 弘夫(東北大)

司会：オリオン・クラウタウ(龍大)

近代仏教に関する研究は近年活況を呈しており、吉田久一、柏原祐泉、池田英俊といったこの分野の先学者たちが提示した学説やイメージは、大きく塗り替えられようとしている。

日本仏教史において、「近代」なる時代の研究が盛んとなったもうひとつの理由は、林淳が指摘するように、それがひとつの「時代」でありながらも、同時にそれ以前の全ての「時代」に関わらざるを得ないという宿命を負っているところにある。今、我々が有する聖徳太子像や親鸞像は、近代以前からあるものではなく、歴史学者をはじめとする近代の研究者が、史料、遺物などを研究調査して、そのなかで作り出されたものだからである(“Introduction,” in *The Eastern Buddhist*, 42/1, 2011)。それらは、一方では史料に制約されながらも、他方で研究史にも制約されたなかで描き出された歴史像である。この点で、古代、中世、近世も、近代歴史学がなければ存在しないとも言えることできよう。しかし「近代」とはひとつの時間枠を指す言葉であると同時に、来たるべき——或いは場合によって、積極的に築かねばならない——今後の世界を示す用語でもある。つまり「近代」の探求こそ、「近代」の大きな特徴であると言えるかもしれない。

ただし、「近代」を獲得して、それすら「超克」しようとした戦前日本の学界は、第二次世界大戦の敗北に伴う大日本帝国の崩壊に直面した際、日本がそもそも「近代化」できていたのか、という自己批判を始めた。新たな世界、新たな理想、新たな近代——それまでの様々な思想分野は大きく変化することとなり、「日本仏教」も無論、そのひとつであった。「戦後」の体制において研究活動を開始した研究者たちは、どのような「日本仏教」を描こうと試み、またそこにはどのような苦悩と期待があったのか。こうした問題を解明すべく、本パネルは1940年代後半より1970年代初頭にかけて展開された日本仏教研究について、その担い手の一部による行動と思想を踏まえつつ、再考しようとするものである。

【クラウタウ】

「戦後日本仏教学説の課題」において、戦前・戦時中の日本仏教研究の問題について触れつつ、敗戦後における日本仏教研究が以前のそれに比較して如何に変遷したのかを検討し、後の発表者が考察する対象のため、その全体的枠組を提示しようとする。

【桐原】

服部之総『親鸞ノート』(1948)を踏まえ、戦後親鸞像の「語り直し」の始原を検討する。戦時期に称揚された「偉人」の多くは、戦後に「追放」されたが、一方で奈良本辰也『吉田松陰』(1951)のような「進歩的」研究者による「復権」も見られた。服部の親鸞論が位置する史的位相を論じたい。

【ワルド】

東日本大震災以降、仏教と死者との関係をめぐる議論は新たな勢いで、様々な方面からなされるようになった。「葬式仏教」なる用語を世に問うた圭室諦成の同名著書(1963)が多くの人々に再読されている現在、ワルドはこの業績の言説枠および意義を再考しようとする。

【碧海】

仏教民俗学の提唱者である五来重の日本仏教論を再検討する。近代仏教の「ビリーフ中心主義」を執拗に批判し、民俗学との協業から日本仏教を語り直そうとした五来重の学問は、戦後の日本仏教論の中でも特異な意義を有していた。その特異性について、「戦後」の文脈の中で改めて考えなおす。

ひとつの分野に閉じこもらない広い視点と、日本仏教の通史的な描写を果敢に提示してきた東北大学教授の佐藤弘夫に、本パネルが扱う時期における日本仏教論の意義についてコメントを頂戴する。

9月9日(日) 14:10-16:10 第9部会

宗教的「いのち」観の危機と課題

代表者：安藤 泰至

宗教と「いのち」言説—生命をめぐるポリティクスの中かで—
 「いのち」を生きることの困難—僧侶の病床訪問活動から—
 「選択」から「応答」へ—いのちの倫理における宗教の役割—
 「いのち」が語られる地—他なるものとのかわりをめぐって—

安藤 泰至 (鳥取大)
 大河内大博 (上智大)
 空閑 厚樹 (立教大)
 竹之内裕文 (静岡大)

コメンテータ：脇坂 真弥 (東京理科大)

司会：安藤 泰至 (鳥取大)

宗教的「いのち」観の危機、というタイトルは奇妙に感じられるかもしれない。教団としての諸宗教が危機に陥ったとしても、それは諸宗教の説く教説それ自体やその背景にある「いのち」観の危機ではない、という見方も可能だからだ。しかし、本パネルは、現代社会において、そうした「いのち」観それ自体が危機にさらされており、新しい挑戦を受けているという認識に基づいて企画されたものである。

「いのち」という語は、生命、生、生活、人生といった語と重なりつつも、それらには回収されない超越的なものとの関係を含んだ生の次元を示す語として、宗教においてもよく用いられてきた（日本語以外の言語にもその意味内容に相当する語や表現があることは言うまでもない）。しかし、諸宗教において人間と神仏、世界の根底に見出されてきたような「いのち」は、教義や教典ないし宗教的な権威に基づいているというよりは、自然や他者、神仏と関わりつつ営まれる人々の日々の生活の実感に支えられてきたと言えよう。現代社会においては、さまざまな生命操作技術の発展や生命をめぐる政治によって、私たちの生命が対象化され、生命、生活（くらし）、人生、いのちといった生の諸次元が分断されることで、このような「いのち」への視線自体が危機にさらされている、というところから私たちは出発する。なぜなら、「いのち」が分断され、管理され、蹂躪される、そうした現実を批判的に認識することなしに、諸宗教の伝統的な「いのち」観が無反省に説かれた場合、宗教的な「いのち」言説そのものが、ある種の補完的な装置として、そうした「いのち」の分断や蹂躪に荷担してしまうことになりかねないからである。

現代社会において、広い意味での宗教的な次元ともつながる形で「いのち」をめぐる視線や言説が問題とされる実践的な領域は、医療・生命倫理、福祉、教育、環境など多岐にわたっており、本パネルはそれらの領域を網羅するものではないが、各発表者のこれまでの関心と主たる研究成果に基づいて、有意義な問題提起を行いたい。

【安藤】

上記のような本パネルの主旨を確認しつつ、宗教のそれを含む現代の「いのち」をめぐる言説とそれが置かれている社会的・政治的な文脈を考察するとともに、宗教的な「いのち」言説の中心となる「いのちの有限性」の自覚や「共生」の理念などがいのちの分断、蹂躪という現実をきちんと認識せずに説かれた場合の危険性について、批判的に検討する。

【大河内】

これまで公立病院、緩和ケア病棟、ビハラー病棟などでスピリチュアルケアの提供者として活動してきた経験から、病院という公的な場において、ケア提供者である医療従事者の間に見落とされている、患者が自らのいのちを生きするために必要な宗教的視点、あるいはスピリチュアリティへの眼差しについて検討する。

【空閑】

生命倫理の諸課題について宗教に期待されていることと宗教が提示していることとの間に齟齬があることを指摘した上で、宗教は特定の回答を示すものではなく、当事者が直面する課題を腑に落とす契機を整えるものであること、またその契機は具体的な暮らしの中において意識される可能性があることを持続可能なコミュニティ実践を紹介しつつ検討する。

【竹之内】

「いのち」はどのように語られうるのかという問いのもと、生命体をとり巻くもの（環境）との不可避なかわり、生命そのものの世代継承という営みに注目しながら、他なるもの（者・物）とのかわりにおいて初めて成立する「いのち」の側面について考察する。

このように、後の三者の発表は、安藤の問題提起に対するそれぞれの立場からの応答という意味ももつことになる。セルフヘルプグループや田中美津の思想研究において「いのち」への問いに関わってきた脇坂真弥によるコメントを得て、フロアとのやりとりを交え、立体的で実りある議論の展開が期待できる。

9月9日(日) 14:10-16:10 第10部会

大震災の問う物質と靈魂—日本仏教再評価の一環として—

代表者：戸田 游晏

初期ジャイナ教の生物観—靈性を共に生きる—

杉岡 信行(近大)

バイオリージョンの視点から見た日本の風土と信仰

永原 順子(高知工業高専)

崇り神としての放射能—仮面の「一神教」と祀りの手筈—

實川 幹朗(姫路獨協大)

モノたちとの共生きと癒し—臨床と仏道の環境観—

戸田 游晏(宇部フロンティア大)

コメンテータ：森岡 正芳(神戸大)

司会：實川 幹朗(姫路獨協大)

昨年の大震災を機に、私たちは「自然」との付き合い方を問われている。近代にあって、「自然」とは物質であり、ハイデゲルの言う如く用材、人間のための道具である。しかし、巨大地震の力は、人間の備えをたやすく打ち砕き、そればかりか大量の放射性物質を撒き散らした。この放射能は、人間が用材として支配し、管理していたはずのものである。

近代の宗教学と近代化した宗教は、関心を内心の信仰に集めてきた。形に表われる儀式なども、その表象する精神性で評価されるのが常である。これは、物質としての「自然」の支配と裏表をなす。つまり、物質の用材化あってこそ、これとの無関係を装った精神的な信仰もまた、成り立つからである。「自然」への支配と管理が問われるなら、宗教の精神性も問われずにはすまない。日本仏教のあり方の再評価から、この問いを考えてみる。

【杉岡】

日本仏教は、インドから東アジアを経た思潮が、土着の心性と融合して形成された。仏典にはない「山川草木悉皆成仏」が、重要な仏教思想として流通するのは、日本仏教の著しい特色とされる。しかし、「自然」の物質に魂を感じ取ること、人と森羅万象との対等の付き合いは、淵源である仏陀の時代(ジャイナ教発祥の同時代)のエートスでもあった。人びとが仏の教えに出会ったとき、洗練された哲学的教理にではなく、ジナと釈迦との同時代に生きた山川草木との共存(生かし合い)に感応したのではなかったか。これは文献学からも顧みることができる。杉岡の担当がこれである。

【戸田】

臨床系心理学で昨今、「仏教」が注目されるが、概ねは哲学的教理面の援用である。上座部に関心を深めた知識層からの「墮落した」民俗仏教批判も耳新しくない。民俗仏教的事象については、文化人類学・民俗学の構造的分析の報告が見られる。だが、癒しや救いの実効性を参照する研究は、殆ど行われていない。つまり、近代宗教学に通ずる内面主義の延長でしかない。日本仏教の、「自然 [nonhuman]」との対等の付き合いの一面をなす加持祈祷の癒しの機能を、学術の枠組に収める努力は乏しい。日本仏教の潜在力を新たに評価する試みとして、加持祈祷と総称される宗教的治療および仏道の営みと、心理臨床事例、殊に「場(環境)」の意義の観点からの、心理臨床実践方法論との比較を戸田が担当する。

【永原】

日本仏教では、仏陀の頃のインドの世界観が、日本近代の隠れた古層に息づく民俗の力に通じている、と考えたい。これはバイオリージョン(生態系を、自然物だけではなく人間の営みである文化・経済等とあわせて考える)の思想に繋がる。いまや、事故で漏れ出した放射性物質との「共生き」は避けられない。馴染み深い「心の内側」の探究(内なる仏を求める)を超え出ない限り、定め論となり、現状の追認に留まるであろう。その対極と見做されがちな「エンゲージ」運動への傾斜もまた、精神による物質支配にふたたび近付きかねない。「自然」のなかでの靈性を帯びたモノたちとの付き合いという土着的視座には、アボリアを超える示唆が見いだせるかもしれない。これが永原の担当となる。

【實川】

放射能を、人間の触れるべきでない特殊な領域と見て、反原子力が主張されることがある。人々はそこに「一神教的」な、力への意志を見るのであろう。たしかに、目的に添った支配の貫徹という意味で、これは「一神教的」である。しかし、超越的領域をタブーとして遠ざげる構えにも、「一神教的」なるものの別の顔(面)が窺える。原子力利用と、火の使用や火薬の発明等との決定的な断絶の根拠は見だし難い。本居宣長の明言した、強い力の発現を神靈の徴しと見る日本民俗の思想から、放射能にも「靈力」を認め、鎮めて祀り、付き合うあり方がみちびかれはしないか。古来の思想が新たな経験に触れ、未来の環境モデルとして顧みられる機に私たちは臨みつつあるかもしれない。これが實川の試論の趣旨である。

9月9日(日) 14:10-16:10 第12部会

日韓宗教文化のトランスナショナリティ

韓国における社会変動と日系新宗教の布教
韓国のメディアを通じてみる「倭色」宗教
在日大韓基督教会と韓国系キリスト教会の日本宣教
朝鮮学校教員家族における祖先祭祀

代表者：櫻井 義秀

李 賢京（日本学術振興会）
諸 点淑（東西大）
中西 尋子（関西学院大）
猪瀬 優理（龍大）

コメンテータ：田島 忠篤（天使大）

司会：櫻井 義秀（北大）

(1) 宗教文化のトランスナショナリティ

昨今、グローバリゼーションの進展と共に宗教文化の越境性（トランスナショナリティ）が研究されてきている。移民・難民を含む国際的な労働力移動に加えて、世界宣教に力を注ぐ既成宗教・新宗教があり、さらにバーチャルなスピリチュアリティ空間の拡大によって、特定の地域的空間や民族・歴史的伝統に固有なものと考えられていた宗教文化が異文化圏へ浸透していつている。

本発表では、現在、発表者たちが進めている東アジアにおける宗教文化の動態調査のうち、この2、30年に限定した韓国と日本の宗教文化交流に焦点を絞り、調査研究のあらましと知見の一部を報告したいと考えている。

(2) 調査研究の経緯

本研究は、韓国側・日本側の研究者がほぼ10年間の共同作業において構築してきた調査研究の一部である。韓国側の調査は、東西大学教授李元範を中心とした韓国学術振興財団人文社会分野支援国内外地域研究助成「日韓宗教の相互実態に関する調査（2003-4）」「日本大衆文化開放による日本系宗教の教勢および受容者の意識変容に関する調査（2004-5）」による。日本側は櫻井義秀を中心として科学研究費基盤研究（B）（1）研究課題番号16320010「カルト問題と社会秩序—公共性の構築に関わる比較社会論的検討—（2004-6）」と萌芽研究（研究課題番号19652006「日韓宗教文化の混在における葛藤とめぐみ（2007-8）」によって、計6年がかりで調査を行ってきた。

日本側の研究者にあった問題意識は次のようなものであった。なぜ、反日教育・感情が根強い韓国社会において日系新宗教、特に日蓮主義の創価学会が韓国第四の宗教勢力となるほど信者を獲得できたのか。なぜ、韓流ブーム以前、韓国への差別意識が強い日本において韓国のキリスト教系新宗教や福音派教会が日本の主流派教会を凌ぐほどの教勢拡大に成功したのか。

従来、このような宗教動態は必ずしも正確に理解されていなかった。したがって上記の問いに対して、宗教文化の土着化論や海外布教の戦略論、及び、ホスト国の政教関係や宗教市場、布教の機会構造から宗教文化交流のメカニズムを探るような研究は、韓国、日本、その他の国の研究者によってもなされてこなかった。本発表はそのような研究の隙間を埋め、さらに宗教文化のトランスナショナリティに関する宗教理論の産出に寄与するものである。

この度は時間の関係で調査の概要を素描するに留まるが（研究成果は2011年に書籍として刊行済み）、韓国側から韓国における日本の新宗教による布教の動態とメディア報道の特徴、日本側からは韓国系キリスト教会の宣教と在日コリアンにおける先祖祭祀の現状を報告する。なお、司会の櫻井は調査全体の宗教研究における意義を総括的にまとめ、コメンテータの田島は現代宗教社会学の観点から本研究の意義や課題についても言及する予定である。

(3) 書籍の刊行

櫻井義秀・李元範編著『越境する日韓宗教文化——韓国の日系新宗教 日本の韓流キリスト教』北海道大学出版会、2011年、A5判・上製・500頁・定価7350円（税込）ISBN978-4-8329-6757-1

韓国語版 이원범, 사쿠라이요시히데 지음, 2011, 「한일 종교문화 교류의 최전선——일본의 한류와 한국의 일류」 인문사（李元範・櫻井義秀編、2011、『韓日宗教文化交流の最前線——日本の韓流と韓国の日流』人文社）、A5判・全562頁。

9月9日(日) 14:10-16:10 第13部会

日本人の宗教性を問う一欧・米・韓・日の宗教事情を通して一

代表者：藤 能成

韓国の宗教事情と日本人の宗教性

藤 能成(龍大)

アメリカの宗教事情と日本人の宗教性

那須 英勝(龍大)

ヨーロッパの宗教事情と日本人の宗教性

寺本 知正(NCC 宗教研究所)

寺院の役割と日本人の宗教性

長岡 岳澄(中央仏教学院)

ビハーラ活動と日本人の宗教性

伊東 秀章(浄土真宗本願寺派総合研究所)

コメンテータ：原田 哲了(龍大)

司会：藤 能成(龍大)

「日本人の宗教性」は、観点の違いによって大きく評価が分かれる。まず欧・米・韓での滞在経験を持つ研究者が、それぞれの国の宗教状況と対比しつつ「日本人の宗教性」について検討する。さらに現代の日本における宗教活動の現場としての「寺院」および「ビハーラ活動」に関する調査結果を通して、そこに関わる人々が「宗教性についてどう考えているのか」を考察する。

日本では神仏習合の歴史を通して、個人の宗教的寛容性が育まれてきた。現在でも殆どの地域に神社と寺院が共存し、人々はそのどちらにも参拝する。正月は神社、彼岸・お盆はお寺に参拝し、クリスマスを祝うという習合的信仰形態が一般化している。これらは「宗教的不節操」のように思えるが、3.11 東日本大震災後、暴動も略奪も起こさなかった日本人の高い秩序意識は、世界の注目する所となり、その根底に日本特有の優れた宗教性を見いだそうとする研究者も増えている。

【藤】

日本社会を「世俗化された非宗教的社会だ」と見る。日本人の多くが西欧近代の科学主義による教育の下で、物質主義・利己主義・刹那主義に陥り、人生の意味や目的を喪失し、孤独・孤立・不安に襲われ、死を恐怖する現状を指摘する。韓国は日本と同じ多宗教社会でありながら日本と異なり、人々の宗教や聖職者への尊崇の念は深く、信仰への関心が高い。そのような違いが出てくるのは何故だろうか。

【那須】

日本の宗教批評家が「日本人」を「世俗的で無宗教」だと批判するのに対し、アメリカの宗教研究者が、自国の宗教事情と比較して、日本は中世以来「世俗的」かつ「宗教的」であることを両立させてきた社会であり、その結果、現代の日本人は非常に多元的で寛容な宗教性を持っているとの指摘を提示する。また、大震災後の混乱の中でも暴動や略奪が発生しない社会を可能にした日本人の道徳性・宗教性について、宗教の「公益性」の観点から大きな関心が寄せられていることを紹介する。

【寺本】

ヨーロッパ人キリスト教神学生が日本の諸宗教を学ぶプログラムにおいて、彼らの関心が日本の多宗教共存環境にあることを提示する。現在多宗教環境化するヨーロッパでは、宗教の共存が神学的にも教会活動としても様々に議論されている。ヨーロッパとは異なる歴史的な脈で多宗教共存が成立してきた日本の宗教には、「一つの真理、一つの教会、一つの信仰」というモデルでは捉え切れない宗教性があることを指摘する。

【長岡】

浄土真宗本願寺派における「第9回宗勢基本調査」の結果から、現代社会における寺院の役割について考察する。現代社会における寺院の役割については、近年、示唆に富む意見や活動事例が提示されているが、長岡は「宗勢基本調査」の結果から、特に寺院の置かれている状況と、寺院関係者が寺院の役割をどのように捉えているかについて検討し、より普遍的な寺院の役割論を探る。また、そこから日本人の宗教性の一端を捉えることができよう。

【伊東】

ビハーラ活動についての調査を通して、日本人の宗教性について考察する。ビハーラ活動とは、病院や特別養護老人ホーム等で、仏教者がガン患者や高齢者など、様々な生死の問題に対面する人々に関わっていく対人援助活動である。「生死の問題の解決」はビハーラ活動の目的の一つであり、日本人の宗教性と密接に関わる問題である。このような臨床場面としてのビハーラ活動の観点から、日本人の宗教性について掘り下げる。

本発表では、以上を通して、「日本人の宗教性の諸側面」を、諸外国との対比を通して検討し、それらを「宗教活動の現場から見えてくる具体相」と擦り合わせることによって、「日本人の宗教性」の現実相をより立体的に浮かび上がらせることを目指す。